

『ハムレット』(RSC/2001年) 上演批評 —現代的演出法と政治劇的構想—

古 屋 靖 二

劇団：Royal Shakespeare Company (RSC)、演出：Steven Pimlott、主演：Samuel West による『ハムレット』上演（劇場：Royal Shakespeare Theatre、上演期間：2001年3月31日～10月13日）について、まずその概要を解説しよう。

(1) 上演時間：4時間（2幕2場第2独白後、及び4幕4場第4独白後、各15分、計2回の休憩を含む）。この長さは、イギリスでの過去10年間程の『ハムレット』上演に於いて、1992年RSCによる上演（演出：Adrian Noble、主演：Kenneth Branagh、4時間半）¹に次ぐ長さ。

(2) 使用テキスト：Q₂とF₁を中心にQ₁を加えた3つの版を合成し、相互に参照したもの。部分的な台詞の削除はあるが、4幕6場を除く全ての場を演出した意欲的で本格的な上演。

(3) 時代設定・衣装（Carrie Baylis 担当）：2001年現在。現代服（近年『ハムレット』上演の一般的な傾向）。特に主な登場人物の注目すべき衣装について—

1. ハムレット： 最初登場した時から全身黒のファッション。黒いフードつき綿トレーナーと黒い木綿ズボン [写真②]。その後、黒いTシャツ、さらにその上に黒い皮ジャケットを着用 [写真④⑤]。ほとんど素足で通すことで宮廷（体制）に対する反逆児のイメージを演出 [写真⑤⑥⑫]。

2. オフィーリア： 前半、両手が袖に隠れたルーズなニットのセーターなど、若者特有のカジュアルウェア [写真⑨]。「狂乱の場」では借り物の大きな白いジャケットを羽織っているだけ。ハムレットと同様、ほとんどの場面で素足。

3. 宮廷人： 王、ポーロニアスほか全員がダークグレイのビジネス用スーツ

（王妃と二人の女官は同色のツーピース）と黒の靴で統一。「墓場の場」では全員黒のコートと中折れ帽子 [写真⑰⑱]。全員ネームプレートを胸に付けている。没个性的で、よく管理された集団のイメージ。宮廷人を演じる役者達（全部で13名）が3幕1場～2場で旅劇団員として登場の際は、ジーパンなどのラフな普段着でハムレットとの親近感を表わす。

4. 亡霊： 裾の長い軍服のコート [写真③⑫]。夜警の兵達、フォーティンブラスもほぼ同じ軍服姿。

(4) 舞台（Alison Chitty 担当）： 広々とした舞台空間、薄灰色を背景の基調とし、想像力をかき立てる [写真①]。当シーズンは、RSTの前舞台の左右の横幅を最大限に拡張し、奥行きも40フィートに広めている。そのため私的な対話の場面では広すぎ（2幕2場： 離れて向き合う王と王妃の間にポーロニアスが立って対話、3幕4場： Gertrudeとハムレットとの対話（写真⑫）、4幕7場等）、登退場は、度々急ぎ足または駆け足。一方、拡張された前舞台の最も効果的な使用はハムレットとレアティーズとのフェンシングの大立ち回りの場面。また舞台前面を観客席一列分（40席）を取り外し、部分的改造をして張り出し、また歌舞伎でいう花道（客席へ直角に伸びた張り出し廊下）の設営によって、役者と観客との身近な関係（'a new more dynamic': RSCパンフレットより）が構造上容易になった。（RSCの花道設営のアイディアは1997年Adrian Noble演出の『シンベリーン』²において初採用。）RSCが今回行った舞台改造（'the most radical transformation in its history': 同上パンフレットより）は一長一短あり、その評価は批評家の間でも分かれている（例えば、Susannah Clapp, *Observer*, 2001.6.5 参照）。（なお、RST劇場そのものを改築すべきか、博物館として保存すべきかについて目下検討中。）

(5) 小道具： 1. 大きなものは2脚の木製椅子。玉座をはじめ、対話の場面の椅子として多用される。その他、スクリーンとしても使われるアラス織りつい立て [写真①⑩⑪]、また開幕の亡霊登場の場面での大型の三脚式サーチライト2個が、劇中劇の場で王と王妃を照らすスポットライトとしても使われる [写真①⑩]。

2. ハムレット携帯の小道具： 折りたたみナイフとピストル。第1独白では

銃口を自分の頭に向ける。ナイフは1幕5場の"Upon my sword"の誓いの場面で使用。5幕2場では"a man's life's no more than to say 'one'" (74) でピストルを観客に向けて構える。王殺害の瞬間では王の額を剣で突き、毒杯を飲ませ、さらに喘ぎつつガートルードに這い寄り王に対してピストルで止めを刺す。なお Alex Jennings が演じたハムレット (RSC, 1997年、Matthew Warchus 演出、現代服、先王と王子の関係と復讐を強調)³も常時ピストルを携帯。

3. オフィーリア携帯の小道具： ハムレットからのラブレターの束とそれを収めた箱。「尼寺の場」でその箱の中から取り出した手紙をハムレットに返す。オフィーリアは発狂後、この手紙が花の代役を果たし、ちぎりながら回りの人に手渡す。

(6) 照明 (Peter Mumford 担当)：最新の技術を駆使して、黒色の回転式ライトが、舞台後方の両側壁の天井部分と床上のところに3個ずつ、また舞台前方左右に2個ずつ設置され、各々上下左右に移動可能。これらの装置によって舞台が広い室内の映画撮影現場を思わせる [写真①]。また場面の移行に応じて、舞台全体の照明が亡霊登場の場面は紫色、王と王妃とポローニウス一家登場の場面は青緑色等に区別され、これらの視覚効果によって各々の場の特色が観客にとって判別し易くなっている。

(7) 主な役者とその役柄・演技の特徴：

1. Samuel West (Hamlet)：当時34才 [写真②③④⑤⑥⑦⑩⑪⑫⑬⑮⑯⑰⑱]。

この上演の前年にあたる2000年、今回と同じ演出家とのコンビで好評だった the Other Place でのリチャードⅡの役柄に続き、RSCでの主演第2作目として注目と期待を集める。父親 Timothy West、母親 Prunella Scales を両親に持つ役者一家。知性的でクールな顔立ち、巻き毛、精力的で軽快な身のこなし、緩急・強弱を自在につけながら台詞を操る話術と、歯切れがよく、張りがあり透き通るような声など、ハムレットを演じる上での資質を十分に備え、イギリス期待の若手役者。前年の2000年、イギリスで絶賛された Simon Russell Beale (当時39才) 演ずるハムレット (National Theatre 劇団, John Caird 演出、現代服、背が低くずんぐりした体格、張りのある声と明瞭な発音

で持ち味を発揮。外交問題を削除し、家庭・復讐悲劇の面を強調)⁴との比較の点でも注目される。West は気さくで、同時に孤高のイメージを漂わせた言動、特に体を張った熱演ぶりが批評家の間でも好評。もっとも彼の問題点を指摘した辛口の批評もあり、彼が「最も深みのあるハムレット」ではないとしても、王子の台詞に新鮮味を付与した「最も素晴らしい若手イギリス人役者の一人」(John Gross, *Sunday Telegraph*, 2001. 5. 6) と言ってよいだろう。

2. Alan David (Polonius / Gravedigger の二役) [写真⑧⑯⑰⑱]。自信過剰で口喧しく、そこにコミカルなイメージを留め、度々観客の笑いを誘う。主人公役の West 以外では、全体的に役者不足の感がある中で、最も存在感のある個性的な演技。よく通る甲高い声と速い語り口が、ポローニアスの饒舌ぶりや威圧的な父親像を一層印象的なものに。もっとも個性的な演技の分、「まったくもって嫌な奴」(Michael Billington, *Guardian*, 2001. 5. 4) との辛口の批評も受ける。

3. Larry Lamb (Claudius)：淡白で、人当りはよいが精彩を欠き、王妃との熱烈な愛の仕草もなく、興味を喚起させることの少ない政治家 [写真⑭⑰]。

4. Marty Cruickshank (Gertrude)：王に対して、またハムレット王子に対して深い愛情を示すに足る生氣と行動に欠ける。特に「王妃私室の場」(3幕4場)でのハムレットとの握手のみの別れは示唆的。墓場ではサングラスを着用し、無表情を繕う演出がいつそ彼女の淡白さを表わす [写真⑩⑫⑬⑰⑱]。

5. Kerry Condon (Ophelia)：全体として無作法で無造作。うわずった甲高い声。細身。今風のショートヘアスタイル。知性的な West が演ずるハムレットの恋人役としては気品に欠け、不釣り合い。両者間の恋愛感情の示唆も乏しく、素足愛好という'癖'の共通点だけが目立つ。彼女についての批評も一致して手厳しい [写真⑦⑨⑰—オフィーリアの遺体は白い布で象徴される]。

6. Christopher Good (Ghost / Osric)：亡霊の姿で息子へ復讐の命令を下す場面での激しい抱擁、絶叫、号泣など、感傷的な演技が過剰。登場人物中、唯一、感情をむき出しにしてそれだけ目立った存在。"Oh horrible, oh horrible, most horrible!" (1幕5場80行)の台詞をハムレットと二重唱 [写真③⑫⑬]。

7. John Dougall (Horatio) : 絶えず冷静で、ボーカークフェイス。ハムレットの信頼を一身に受ける。室内、屋外を問わず、常にダークグリーンのコートを着用 [写真⑩]。

*

以上の本上演の概要を踏まえて、演出法とその構想(コンセプト)の解題と批評に入ろう。演出担当のSteven Pimlottは、古典劇を扱う演出家の中で最も現代的な演出法を打ち出す演出家の一人であると見做されている。彼がRSCの演出家として新しく任命された1996年の『お気に召すまま』(RST劇場)では、木の幹を表象する輝く金属製の柱の群れによってアーデンの森を抽象的、幻想的に演出して、その片鱗を実感させた。今回の彼の演出法は、視覚的な独創性に富み、新鮮で、時に手の込んだ現代的仕掛け・装置によって4時間の間、観客に緊迫感と驚きを与え続けた。いくつかの場面をその例として挙げれば—

1. 開幕「亡霊登場の場」 : 闇の中、まず観客席を照らしたサーチライトが亡霊の登場に際して点滅し舞台中を探索する中、番兵達が退場する亡霊を機関銃で撃ち続ける。

2. ハムレットは第2独白の最後に劇中劇によってクローディアスの正体を捕らえようと決意し、彼が両手を挙げる合図で2つの照明の白い交錯する光線が一斉に彼の頭上を照らして、奥中央出口より退場する。その状況は、劇中劇によって真実が啓示されるという、まさに'dramatic lighting transformations'(Patrick Carnegy, *Spectator*, 2001, 5.12)を象徴するような迫力を感じさせた。

3. 「劇中劇の場」 : 黙劇で、狂想的な音楽とカラフルに変化する照明が背景。舞台中央の椅子に座る国王夫妻を取り囲むようにして、現代服の役者達による誘惑の濃厚なセクシュアルダンスが演じられる [写真⑩]。その後この場の謂わば演出家であるハムレットの指図に従って、ホレイションは劇中劇を観る王と王妃の反応をビデオカメラに納め、撮影される王と王妃の顔のひきつった表情を同時にスクリーンに数秒大写しにし、ハムレットは両者の白黒の決着を観客にも促そうとする。

4. 「王妃私室の場」 : スクリーンの後に隠れていたポローニウスをハムレットがピストルで射撃。もがき息絶えるポローニアスの哀れな姿がスクリーン上にシルエットで映る [写真⑪]。

このような意表を突く現代的仕掛けの演出法は、2000年のニューヨークを舞台とし最新の視聴覚・情報機器をスクリーン上で駆使して話題になったMichael Almereyda監督の映画『ハムレット』(2000年制作)を想起させる。Pimlottは劇場での観客反応を重視し、彼等との身近な関係を維持しながら、彼等の積極的な参加を働きかける仕組にも細かな配慮をしている。例えば、RSCのThe Swan劇場やThe Other Place劇場(残念ながら2001年に閉鎖)など、観客との親密な関係維持が容易な小劇場での雰囲気と劇的效果を、RST劇場においても演出しようとする入念で積極的な工夫が見られるいくつかの場面を挙げてみよう。

1. 「会議の場」 : 観客へ向かって拍手をしながら登場する宮廷人達。拍手で迎えられた新王クローディアスは、ガートルードの手を取り、一列横隊の宮廷人を背後にして、開口一番、観客に向かって即位と婚儀の挨拶を述べ、"for all, our thanks" (1幕2場16行)の台詞で、宮廷人全員と共に観客に向けて拍手して賛意を求める。

2. ハムレットの独白 : すべて前舞台で観客と向き合い、時に直立し、時にしゃがみ込み、稀に観客席に駆け降りて "Am I a coward? / Who calls me villain...?" (2幕2場523行〜)と叫ぶ。一人瞑想するというより、観客に対して自然体で胸の内を語り明かす様子 [写真④⑤]。

3. ハムレットの旅役者達への「演劇論」披露の場面 (3幕1場) : 「自然に向かって鏡を揚げる」の台詞で、突然照明が客席を明るくし、それまで彼を中にして車座に座っていた役者全員がハムレットから観客席の方を向く。

もっとも、これらの入念な工夫は、特に項目3が、わざとらしく見えるという点において劇的效果を損なうということも付け加えておく必要がある。

*

『ハムレット』には復讐劇、政治劇、家庭悲劇、恋愛悲劇、心理劇など、様々なジャンルの要素が混在している。翻案物・改作物を除き、原作に概ね忠実な、

近年のイギリスでの主要な本劇の上演を回顧しても、政治劇色を構想の正面に据えた演出はほとんどない。その意味において、このRSCの『ハムレット』上演は政治劇的要素を正面から中心的構想として取り上げ、それを今まで述べてきた現代的演出法と絡ませて展開させて大いに注目される。従って本上演の狙いは「デンマークの腐敗した政界を極めて現代的に描くこと」(Stephen Brown, *TLS*, 2001. 5. 18) と言えるだろう。王と彼を取り巻く宮廷人集団(現代政治劇風と言えば首相と側近達)の統一された服装、名札、一列横隊や大袈裟な拍手と歓声といった統一行動は、追従者による統治者への無条件の忠誠とその不正な統治者の絶対的政治権力を象徴している。その体制側の対極に位置するのが、孤高のハムレットなのだ。彼は素足とTシャツ姿でジーパン姿の旅劇団員や墓掘り人と同じ目線で親しく語り合う、気さくだが「この世を正す」宿命を自覚する王位継承者である。王への忠勤(スパイ役)に献身する二人の旧友のうち、特にローゼンクランツ(Wayne Cater)は、ハムレットが愚弄してやまない追従人を見事に演じているが、その丹精な容姿と細やかな物腰によって彼とは対照的なギルデンスターン(Sean Hannaway)と対比させられ、風刺政治劇の構築に見事に一役買っている[写真⑥]。このような政治劇としてテキストに基づく明確な演出法を外交問題に関して2つほど挙げたい。まずノルウェイへの使者、ヴォルティマンド(James Curran)とコーネリアス(Chuk Iwuji)の「良き知らせ」に対する宮廷挙げての大袈裟な歓声と拍手(2幕2場)、そして閉幕でヴォルティマンドが新王フォーティンブラス(Finn Caldwell)を出迎え、そしてそこに居並ぶ宮廷人全員が歓迎と承認の儀礼的なお決まりの拍手をすることによって、王位継承・新王即位問題が決着する。劇の大詰めは、ハムレットの「あとは沈黙」の台詞によってではなく、それまで舞台奥に控えていて急遽、フォーティンブラスの登場に合わせて駆け寄る宮廷人達の一斉の拍手、そしてそれに続く舞台の突然の暗転と静寂によって政治的枠組みは完結される。宮廷人達の権力者崇拜志向に対する辛辣な批判を明示して閉幕する。

ここまでの解題と上演批評によって、この上演の政治劇的構想を過度に指摘したつもりはないが、「権力について冷酷なまでに描写した上演」という批評

の正当性は否定し難い。王を頂点とする社会集団の堅固な体制を前面に謳いあげた政治劇としての特質が、悲劇の主人公ハムレットの個性演出を妨げているといった趣旨の問題指摘(John Peter, *Sunday Times*, 2001. 5. 6 参照)は十分に傾聴に値する。大きな額縁風劇場であるRST劇場が取り組んだ舞台改造と積極的な観客への働きかけ、また今までの筆者の観劇体験にはなかったような意表を突く現代的演出法は特筆されるべきであろう。しかしその背後で、入念に、そして稀にわざとらしい演出の姿勢が目立ち過ぎると思われ、それが不幸にもShakespeare劇に本来内在している豊かな意味の広がり制限しかねない。ここに現代的演出法の功罪を垣間見る気がする。一方において「力強い上演」との評価を受けながら、他方「寒々とした上演」との酷評(e.g. Alastair Macaulay, *Financial Times*, 2001. 5. 8)を受けたのも、この辺と無関係ではない。いずれにせよ本上演が現代における『ハムレット』上演の行方を示した一つの実験的試みと言って差し支えないであろう。

最後に付け加えたいことは、現在イギリス演劇界を担う役者で、1988年以降の優れたハムレット役者達一名前を列挙すればKenneth Branagh(1988年 Renaissance T.C.⁵、1992年 前述のRSC)、Mark Rylance(1989年 RSC⁶、2000年 The Globe⁷)、Ralph Fiennes(1995年 Almeida⁸)、Alex Jennings(1997年 前述のRSC)、Simon Russell Beale(2000年 前述のNational Theatre)等々に劣らぬ資質と個性を兼ね備えていると評価できるSamuel Westが、近い将来再びハムレットに挑戦する演技を今度はThe Swanのような小劇場で観たいものである。それにはどんな演出の構想が伴うのだろうか、期待が膨らむのは筆者だけではあるまい。

[脚注]

テキストからの引用は便宜上、全て *Hamlet* (The New Cambridge Shakespeare, Cambridge, 1985) による。

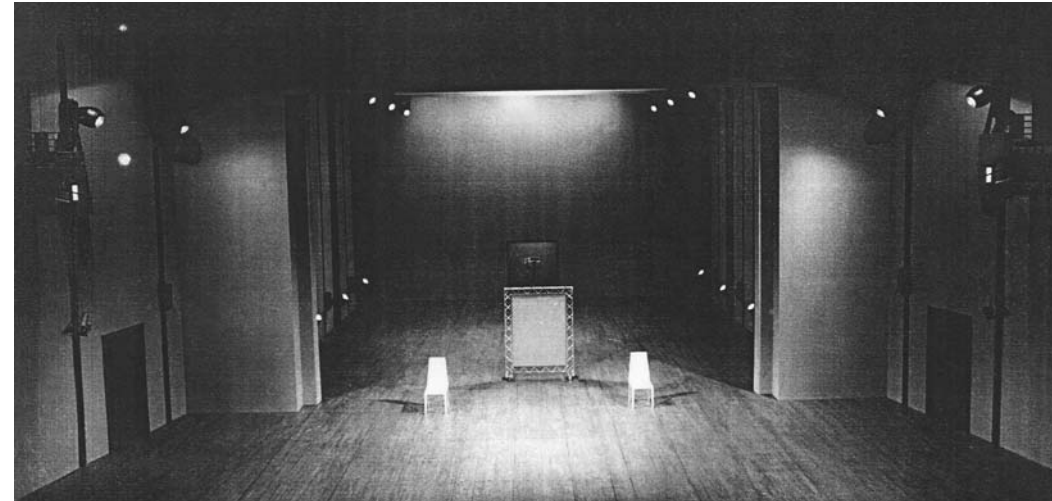
1. 「近年のイギリスでの *Hamlet* 上演状況 1988—1995」『西南学院大学英語英文学論集』第42巻第2号(平成13年12月発行)所収 pp.93-101
2. 「近年のイギリスでの Shakespeare 上演状況 観劇ノートより—その(2)—」『西南学院大学英語英文学論集』第40巻第3号(平成12年3月発行)所収 pp.56-59

3. 同上書 pp.59-63
4. 「近年のイギリスでの *Hamlet* 上演状況 1999—2000」『西南学院大学英語英文学論集』第44巻第1号(平成15年8月発行)所収 pp.114-124
5. 「近年のイギリスでの *Hamlet* 上演状況 1988—1995」『西南学院大学英語英文学論集』第42巻第2号(平成13年12月発行)所収 pp.69-70
6. 同上書 pp.70-79
7. 「近年のイギリスでの *Hamlet* 上演状況 1999—2000」『西南学院大学英語英文学論集』第44巻第1号(平成15年8月発行)所収 pp.103-113
8. 「近年のイギリスでの *Hamlet* 上演状況 1988—1995」『西南学院大学英語英文学論集』第42巻第2号(平成13年12月発行)所収 pp.105-109

*

本稿に掲載した舞台写真は次のものより転載した。★RSCの*Hamlet*公演プログラム(③④⑤⑥⑩⑪⑭⑮) ★Shakespeare Centre Library所蔵フィルム(①③⑦⑧⑨⑩⑫⑬⑯⑰⑱) ★*Plays and Players*、April, 2001(②)

[2001年 RSC 舞台写真]



①劇中劇の場の舞台全景(多くの照明機器、椅子2脚、スクリーンに注目)



②1. 2. 独白中の Hamlet (Samuel West)



③1. 5. 亡霊の場、Ghost (Christopher Good) と Hamlet





④Hamlet (第2独白)



⑥Guildenstern (Sean Hannaway), Hamlet, Rosencrantz (Wayne Cater) (2. 2.)



⑦Ophelia(Kerry Condon), Hamlet (尼寺の場)



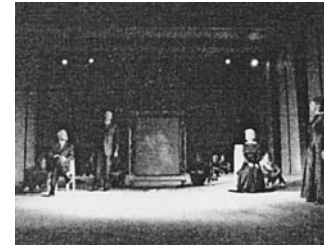
④Hamlet (第2独白)



⑧Polonius(Alan David)



⑨Ophelia



⑩劇中劇の場



Hamlet



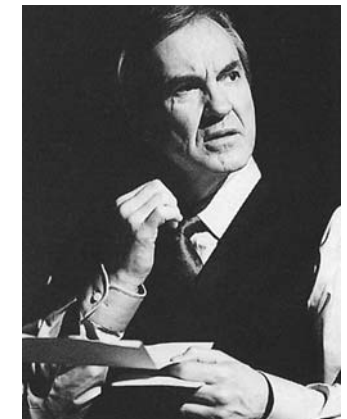
⑪Gertrude(Harty Cruickshank), Hamlet, Polonius(シルエット) (王妃私室の場—⑫も同じ)



⑫Ghost, Gertrude, Hamlet



⑬Ghost, Gertrude, Hamlet



⑭Claudius(Larry Lamb)



⑮ Hamlet (墓場の場)



⑯ Horatio (John Dougall), Gravedigger 1 (Alan David), Hamlet, Gravedigger 2 (Alan Moloney)
(墓場の場)



⑰ Laertes (Ben Meyjes), Claudius, Gertrude
(墓場の場)



⑱ Hamlet (左手奥)、Laertes, Gertrude、宮廷人達
(墓場の場)